

## 研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
A-190	24-075	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門 三浦克之
題名 (原題/訳)		
Neuropathology of deaths due to acute alcohol toxicity in Australia, 2011-2022 オーストラリアにおける急性アルコール中毒死因の神経病理学的研究 (2011-2022 年)		
執筆者		
Darke S, Duflou J, McDonald S, Peacock A, Farrell M, Lappin J.		
掲載誌		
Drug Alcohol Depend. 2024 Oct 1;263:111407. doi: 10.1016/j.drugalcdep.2024.111407.		
キーワード	PMID	
アルコール、神経病理、死亡、罹患;疾患	39151332	
要旨		
<p><b>背景:</b> アルコールによる主な害の一つに、脳に影響を及ぼす構造的病変がある。本研究の目的は以下の3点である。</p> <ol style="list-style-type: none"><li>急性アルコール中毒による死亡症例における神経病理の頻度とその特徴を明らかにすること</li><li>脳萎縮の診断と他臓器病変との関連を比較すること</li><li>脳萎縮と関連する人口統計学的・臨床的・臓器病理学的要因を明らかにすること</li></ol> <p><b>方法:</b> 2011年から2022年にオーストラリアで急性アルコール中毒による死亡と判定された500例を対象とした後ろ向き研究を実施した。臨床情報、毒物検査結果、神経病理および他臓器の病理所見を、警察の報告書、剖検記録、毒物検査および検視所見から収集した。</p> <p><b>結果:</b> 平均年齢は49.5歳で、69.4%が男性、70.2%にアルコール摂取に関する問題の記録があった。脳萎縮は60例(12.0%)で診断されたが、脳萎縮が最も多く認められたのは小脳(32例、6.4%)であった。他の部位での萎縮は37例(7.4%)で認められた。脳萎縮の頻度は、その他の主な病態(心肥大:32.6%、<math>p&lt;.001</math>、腎硬化症/動脈硬化:30.2%、<math>p&lt;.001</math>、慢性閉塞性肺疾患(COPD):21.8%、<math>p&lt;.001</math>)と比較して有意に低かったが、肝硬変(11.9%、<math>p=1.0</math>)とは差がなかった。脳萎縮を有していた症例は、非萎縮症例と比較して年齢が高く(53.4歳 vs 49.0歳、<math>p&lt;.001</math>)、アルコール摂取における問題(85.0% vs 68.2%、OR:2.53)、てんかん発作歴(10.0% vs 3.0%、OR:2.92)、心肥大(43.3% vs 31.0%、OR:1.90)、COPD(48.3% vs 18.2%、OR:3.57)、腎硬化症/動脈硬化(50.0% vs 27.4%、OR:2.27)の頻度が有意に高かった。</p> <p><b>結論:</b> 急性アルコール中毒による死亡例の大半がアルコール摂取の問題を有していたにもかかわらず、死亡例における神経病理所見の頻度は比較的lowであった。</p>		